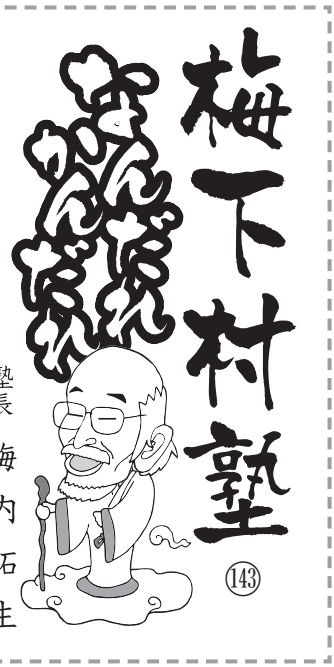
「森と水と命の惑星」国際会議

～地域と世界の心と魂を詠む～



（マスコミと詭弁）

第2次世界大戦の日本に対する極東軍事裁判は極めて戦勝国側の偏見に基づいたものであることは出席したインドのパール判事の言動にも明らかにされている。朝日新聞や毎日新聞などは戦前や戦中には先頭を切って日本軍部の宣伝活動を行ったが、敗戦後は中国やソ連など共産党の宣伝に乗って、日本政府への批判を行っている。

最近では、第2次世界大戦後に既に政治決着をした領土や戦後補償の国際的問題をいろいろな手を使って蒸し返している中国や韓国の宣伝のお先棒担ぎをしている。

新聞やテレビなどのマスコミはいわば情報による公器の役割を果たすべきものであるが、先日の作曲の詐欺事件に見られるように、マスコミが率先して詐欺事件にかかわっていたように、真摯な反省がなされなければならない。いろいろな情報が一瞬にして世界に広まる現代社会においては、情報の内容を吟味する必要があるが、これを誰が、どこで、どのように行い、伝えることが可能なのかという問題を抱えている。

梅下村塾はこの大切な役割の一端を担いでいるものと考えている。ギリシャの文明の論理の伝統はヨーロッパが受け継いだ。インドに生まれた「ゼロ」の哲学はヨーロッパに引き継がれて現代科学に大きな貢献をしている。「ゼロ」と仏教を生んだインド文明は中国に引き継がれて、禅と儒教文化として日本に伝わってきた。日本ではこれらが日本古来の自然宗教文化と融合して、短歌、俳句などの芸術文化を生み出した。

この日本文化の奥には「惻隠の情」や「気遣い」など人や社会をやわらかく包み込む魂が息づいている。この魂は3・11の東日本大震災に被災地の人々が示した忍耐と規律ある行動につながっており、これが世界の人々の心を打ったのである。しかし、「長所と短所は表裏一体」ということわざにあるように、この長所が弱点となることがある。上に述べた日本の「マスコミと詭弁」はまさにこのことを指している。

文化勲章受章者である米国生まれのドナルド・キーン博士は日本に帰化したが、太平洋戦争の最中に、戦場での日本の少年や青年の日記を読んで、自然や家族や友人への深い心に感動し、日本の文化の奥の心に触れたいと思ったと述べている。この日本文化の奥に息づいている魂は、キーン博士が述べているように世界に発信して共有しなければならない。朝日新聞や毎日新聞をはじめとする日本の代表的なマスコミによる詭弁の習性は直しがたいものであるので、東海新報をはじめとする地方新聞やテレビなど地方のマスコミが、その任を追う必要があると思う。

（歴史の知恵と覚悟）

歴史が築いた財産を根こそぎ洗い流された大震災と津波からの復興には、「長い歴史の知恵を活かし、強い覚悟を育てること」が必要です。

（復興への掛け合い）

圭一

討論が必要だけれど声はなし
通るのは声の大きい意見のみ
必要な議論はされず復興へ
「これもない、あれもない」のないない話や「これも欲しい、あれも欲しい」の欲しい話に陥らないように、腹を落ちつけて復興に取りくむ覚悟を育てることが大切です。

拓生

復興の　目鼻は議論の後に生む
言うは易し　行うは難し

（希望の灯）

圭一

被災地に必要なのは希望の灯（ひ）
被災地は希望と失望入り交り
希望の灯がともるには、まず物心のめどが必要です。遠くの朋の心配りがありがたい。

拓生

震災後　遠くの朋の灯がともる

（地球文明の問題）

迫り来る　環境汚染
知らぬふり
大津波　環境汚染　襲い来る
地球規模で見ると文明の危機は迫っている。
大津波　環境汚染に腹決める

（人口増加と文明の存続）

拓生

八十億　超えて地球は危機を呼ぶ
人口減　日本の我慢知恵となる
日本は人口減少に向かっている。この我慢の知恵は世界の宝になる。

（東海新報記事から）

2月27日の世迷言は大学の国際ランキングに関して述べている。国際ランキングはどうも即席にビジネスマンを養成することにつながっているという指摘である。大学は地球文明が遭遇している環境、人口、戦争など人類の存続にかかわるような問題解決を目指す教育とは、かけ離れているらしい。「国際人」とは「酷才人」であると結んでいる。なるほどとうなずけるものがある。梅下村塾が育てている「魂才人」ではいかがなものか。